

次の文章は、茅野良男著「認識論入門」（講談社現代新書）からの抜粋である。以下の設問に答えなさい。

問題1. この文章中に述べられている「生きる」と「できる」の関連について、300字以内にまとめなさい。

問題2. あなた自身はこれまでどのように「生きてきて」、これからどう「生きる」のか、著者の考え方を参考にしながら、600字以内で述べなさい。

「できる」と「できない」

私たちはさまざまなものごとを心に思い浮かべることができます。あるものがあることについて、心を集め、熱中し、心をこらし思いをこらすことができます。ものごとをながめることもできますし、身体を動かしてあることを行うことも、ものを作ることもできます。若い元気なころは、何でも思うことができるような気がします。

しかし気が散って集注できないことがあり、視力が衰えて見ようとしても見えないことがあります。臆病で行為できないことがありますし、傑作などそうだれにもできることではありません。思ったことの十分の一もやれない間に、人生の日暮れとなります。

とくに現今のような忙しい時代になりますと、さまざまな情報、とりどりの知識、異なった考え、そうしたものに一時に取りかこまれ、同時にそれらに向かい合うこととなります。こうした多彩なものをただながめることもできますが、そのどれを選び取り、どれを捨てるか、何を基準にして選択したらよいのか、途方にくれることもできます。正当な知識と不当な知識はどこで見分けたらよいのか、あい争う考えに対し、どういう態度をとったらよいのか、迷うこともできます。途方にくれたり迷ったりすることなしに、ある考えを信じてしまうこともできます。気が変わり、考え方が変化したため、これまで信じていたことを棄てることもできます。

いささかでも世界や人生の実状に通じてくると、おのずから生きる時の考え方が定まり、特定の人生観を身につけることができますが、反面、どんな考え方も世界や人生の実相には一面的でしかないように見え、懐疑的となり、迷うこともできます。そうかと思うと、日常の生活はごく平凡で、頭の中だけ異常なことで満たされることもできます。私たちはむしろ、思いの過剰に悩み、あり余る考えにとりつかれているため、思いを捨て、思い切ることができないのです。あれやこれやを思い、思いをあれこれ集めるだけで、本当に必要なひとこと、真に私に合った思いと

いうものに集注できないのです。

生きることができる

いま私は「できる」とか「できない」とか言いました。これは、そういうこともありうる、不可能ではない、というような消極的な可能性ではありません。私たちは疑いのまま、未決断、不決断のまま、迷いのまま、生きてゆくこともできます。信念や信仰をいだいて生きること、服従しながら生きること人生であり、愛や憎しみや惨めさの感情と共に生きること、欺きや偽りのうちに生きること、やはり一回限りの人生であります。世をすごすこと、世を渡ること、世に在ることは、一回限りの生存であり、どのような生き方をしようが、各人にできる現存です。生きるとは、生きることができるということです。生きるはできるをもともと含んでいます。生きることを殺す、すなわち避けるべき自殺でさえも、できるに基づくのです。

生きるはもともとできるを含んでいます。人間である以上、人間に自然にそなわった本能や素質や能力は、いつでも発揮されています。人間に固有な身体上の体制や機能は、生きている限り、能力を実現する活動であります。これは私たちが思い、行い、作ることの前提です。この意味では、生存が理論や実践や制作の基体です。そして人間の生存とは、心の籠もった身体としてこの世に現存することです。

しかしこの生存としての人間にとり、「できる」「できない」の区別が生じます。生存として一様に生きることができるとしても、さらにその上に、特殊な能力や才能、素質や可能性が要求されるように見えます。むしろ一般に「できる」「できない」というとき、何らかの特別な才能のありなしで判定するように思われます。

「できる」ための素質・可能性

簡単に身体を動かしても、赤ん坊でない限りは、とくにできるとはいいいません。しかし車の運転になると、できるかできないかは、運転させてみればすぐ分かります。スポーツでも同じことです。もちろん現在は運転のできない人でも、その気になって練習すればできるようになるでしょうし、荒っぽい運転の人なら、事故を起こして運転できなくなるかもしれません。特殊なスポーツでも、その気があれば人並みにはやれるかもしれませんが、一流になるためには、人一倍の努力がいり、運もいるでしょう。生まれつき天分がある人でも、訓練によってそれをみがかなければ伸びませんし、鈍根の人であっても、毎日の練習である線までは上達できるでしょう。

身体を動かしたり、道具や機械を操作したりすることは、もちまへの能力のほかには、練習による訓練、ある種の習慣の獲得が必要となります。したがって、自然にそなわった能力だけでなく、それをひき出してみずから訓練し、意図的に練磨した結果、「できる」ようになります。人並み以上のことや普通以上のことを「する」

ことができるのは、たしかに可能性の発揮ではありますが、大ていは放っておいてもそうなったというわけではなく、可能性がひき出されて訓練されたのであります。これは人間だけではありません。よく調教され飼育された動物は芸当を演じることができます。

それゆえ、「できる」ためには、やはりもともとある可能性なり素質なりがなければなりません。しかし自分にどういう可能性や素質が眠っているのかは、自分だけでは分からぬことが多く、それゆえにこそ、人生にはコーチが必要となります。自分でその気になり、コーチの言うことを信じないなら、せっかくの可能性も埋もれたままとなるでしょう。コーチが必要なのは、スポーツの世界だけではなく、まい。

ところが、能力の乏しいものが訓練と練習をくりかえしても、ある水準以上には達せず、能力のあるものはあまり練習しないように見えても、あっさり水準以上の成績を出すことがよくあります。もちろんこれはある種目や課目に限った場合の話ですが、人生という競技では、種目や課目の選択は自由であり、しかもオープン・コースです。それはともかくとしても、できるということは、ある特別の可能性なり能力なりをもつことに限定されがちであります。むしろ、みずから進んで訓練したり練習したりしなければ可能性も発揮されないことは二の次にして、生まれつきの才能や可能性のおかげだけでおのずから「できる」ことだけに注目しがちです。